



木刀による剣道基本技稽古法

平成28年度中学校武道授業（剣道）指導法研究事業

リズム剣道



アイスブレイキングを目的としたゲーム



本事業研究者および日本武道館事務局

平成28年度中学校武道授業（剣道）指導法研究事業（主催＝日本武道館、全日本剣道連盟）は7月1～3日の3日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで行われた。本事業は平成24年度から完全実施された中学校保健体育科における武道授業の充実に向けて、剣道の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価などについて研究協議することを目的とし、学校教育現場における剣道指導の研究者18名が集まった。

「中学校授業現場で剣道は、全体として採用校が増加傾向にあり、評価をいただいています。武道授業のキーワードは対人性です。戦う相手と互いに高め合って成長することは、他の世界にはなかなかないことです。高い目標、志を持った剣道指導のあるべき姿、また、その内容を勉強していただいて、学校現場に活かせる3日間であることを期待します」

開講式後は、各ブロックの研究者による武道授業現状報告が行われた。

■1日目（1日）

14時より開講式が行われ、はじめに小久保昇治全日本剣道連盟審議員が挨拶を述べた。

「この事業は日本武道館の提唱・支援で平成22年から毎年実施しており、私たちはこの研究事業を通じて現場の先生方にいかにわかりやすく剣道の指導法を伝えていくかに力を注いできました。今年も各ブロックの中心的な先生方にお集まりをいただき、全員が一つになって授業の研究とディスカッションを深めていただきたいと思います」

次に、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が挨拶に立った。

◎打川淳研究者（秋田県）

秋田県では多くの中学校で柔道が実施されている。剣道が行われているのは5校で、専門の先生でないと指導できないという意見が根強い。実際に指導が行われている現場でもゲームが中心になっており、基本的なことが身につかないなどの課題がある。

◎渡邊達郎研究者（岩手県）

岩手県では168校中、剣道は23校で採用されており、そのうち11校は剣道だけの選択である。剣道の関係団体による防具の貸し出しが行われている。また、生徒の安全を確保するための工夫や着装時間の効率化を図るため、面タオルを頭巾のようにかぶる方法を採用している。

◎荒川明夫研究者（東京都）

知的障害の学校に勤務している。東京はスポーツテスト最下位のため、基礎体力向上に時間を割いている。礼儀作法の指導では、正座ができない子や左座右起もできない子もいる。興味を持たせるための工夫をし、剣道の授業の後はすっきりする、という生徒もいた。

◎田中一明研究者（神奈川県）

神奈川県では5%が剣道を実施している。厚木市は20年ほど前から盛んである。三拍子追い込み、新聞紙切り、リズム剣道といった基本的な指導は1年生で行い、応用は2年生で学ぶ。授業ではDVDを活用している。

◎福本恵和研究者（奈良県）

奈良県は柔道を51校、剣道を47校が選択している。奈良市内は7割が剣道を選択。評価や生徒指導の問題で、剣道の授業協力者派遣校は2校と少ない。剣道授業を充実させるために、剣道専門の体育の先生の増員、専門ではない先生に研修会へ参加してもらい、剣道の特性や技能を習得してもらう。

◎井寄聖研究者（京都府）

京都府は柔道92校、剣道6校。1年時は礼法、素振り、足さばき、防具の着装を、2年時は切り返し、基本打突、応じ技を行い、3年時は選択制である。毎年1級審査を数名が受験している。今は充実した環境で授業を行っているので、環境が不十分な学校勤務になった場合の授業展開を学びたい。

◎三好英幸研究者（鳥取県）

剣道授業協力者の導入は3校で、手ぬぐいの簡易方法、面の着装などを手伝っていただいている。アンケートの結果、90%は授業協力者に対して肯定的な回答を得ている。今後は事前打合せの充実など、授業協力者との連携をより図っていききたい。

◎吉田将志研究者（長崎県）

11.4%が剣道のみを、18.3%は剣道と柔道の選択制を実施している。長崎県では平成24年から27年にかけて全ての体育教員に研修参加を義務付けた。県で行っている武道・ダンス指導サポーター事業では防具の貸出と運搬費用を県が負担しているが、周知が足りず、昨年は7校のみの利用であった。

現状報告に続いて、小久保研究者によるリズム剣道による授業展開が行われ、夜には現状報告に基づく情報交換がなされた。

■2日目（2日）

この日ははじめに岩脇司研究者による剣道授業における評価についての実践研究発表が行われ、評価は根拠に基づいて行うことや、技能を身につけるためにどのような工夫をしたのか、仲間との関わり方などの過程を評価すること、授業の理解度は、学習ノートを利用するなどしてその時間内に評価すべきことなどが示された。

続いて行われた剣道授業における楽しい動機づけでは、軽米満世研究者による剣道の歴史、山神眞一研究者によるアイスブレイキングを目的としたゲームが紹介された。

次に花澤博夫研究者が防具のない場合の授業展開を、山神研究者が木刀を使った場合の授業展開を、藤田弘美研究者が防具の着装方法を披露した。その後、花澤研究者、山神研究者が技の指導法を、山田博子研究者が気剣体の一致を学ばせるための判定試合の審判法を紹介した。最後に百鬼史訓^{なきりふみのり}研究者が剣道具・竹刀の安全について発表を行った。

■3日目（3日）

はじめに百鬼研究者より授業協力者養成事業について、登録者数は多いが、なかなか広く活用されているとはいえない現状などが報告された。次に小久保研究者より体罰・暴力によらない指導の在り方についての講義がなされ、その後の研究協議では研究者の感想などが述べられた。

閉講式では、網代忠宏全日本剣道連盟常任理事が主催者を代表して挨拶に立った。

「真摯な姿勢で取り組まれ、大変内容が濃かったと喜んでおります。各ブロック代表の皆さんには先生方なりに本研究事業の骨子を理解していただき、さらに指導を深めていただきたいと思います」

続いて、小久保研究者が挨拶を述べた。

「ブロックに帰り、私のところで研究事業やるよと、広く公開授業をしていただけるとありがたい。10月からは研修会が始まりますので、先生方には参加や募集にご協力いただきたいと思います」